

シュメルとシュメル神話の魅力から考えたこと

榎原 まひろ

「このような興味深い神話を持つ文明が五千年も前にティグリス川とユーフラテス川の間であり、人々が暮らしていたのか。」

私は感動した。『シュメル神話の世界—粘土板に刻まれた最古のロマン』を読んでシュメルに対する憧憬を抱いた。年表や史実・歴史的背景とあわせて神話を分かりやすく現代日本語訳し興味深く解説する本書は、シュメルを学習する一冊目の本としてふさわしい。後述した他の神話や宗教との関連や、日本の神話との共通性も指摘しているため、シュメルについて知見のなかった私にも読みやすかった。

令和の世を生きる自分が、何故遠く離れたシュメルに魅了されたのか、シュメル神話を軸として分析することにした。

シュメル神話から捉える人類の普遍性

『イナンナ女神の冥界下り』（アンガルタ・キガルシェ）と『記紀神話』の伊邪那美の類似性について。イナンナは愛と豊穡の女神であると同時に戦争と破壊の女神である。伊邪那美は国や神を生んだのち冥界に下り死を司る黄泉津大神となる。生と死の二面性を持つ。イナンナも伊邪那美も二律背反的な「大地女神」といえる。しかし『アンガルタ・キガルシェ』ではイナンナは冥界を支配しようと赴くのだが失敗している。エレシュキガルが冥界の女神であることには注意が必要だ。（岡田・小林, 2021）

また、世界中で興った大洪水伝説だが、バビロニアとイスラエルの大洪水伝説、つまり『シュメル語版「大洪水伝説」』と『ノアの大洪水』は同系列であるとされている。旧約聖書との親和性も高い。（岡田・小林, 2021）

このような親和性は人々を惹きつけるノスタルジアとなる。人々が「なぜ人間が存在し死ぬのか」などの問いを持った時、神話は一つの解を与えた。つまり、神話が類似しているということは、人々が同じような解に納得していたということである。神話や聖書の内容は人々を納得させるためのある種の「説明」である。その神話の果たしていた役割を現代では科学が代わっている。シュメル神話と日本の神話に共通性が見られるのは、古代の人々が暮らした地域は違えど「似たようなことを考えた」事実を示す。

シュメルを研究する意義と「ロマン」について

『シュメル神話の世界—粘土板に刻まれた最古のロマン』のタイトルに用いられた「ロマン」は長編小説や散文という意味での「ロマン」であろうが私はシュメル神話に対してノスタルジアを覚えたし存在そのものがロマンティックであ

るとも思う。しかし、前田の指摘にはっとする。

最古の文明であるメソポタミアやエジプトに魅了され、ロマンを求める人は多い。それを非難するつもりは毛頭ない。ノーベル賞受賞者がコメントを求められたとき、多くが言及するように、魅了されること、対象に離れがたい愛着をもつ心持ちは、必ず困難にぶつかる研究を続けるうえで必須のものといえる。問題はそこにとどまってしまって、学問・研究であることを忘れる、もしくは無視することにある。求めるロマンが、幻想と伝説の彼方、異郷・魔界へと誘う謎であるならば、論外である。(前田, 2020, p11)

彼が述べたように、ロマンを「追い求める」姿勢ではならないのだ。幾つか日本人とシュメル人との繋がりを示唆しようとする書籍や YouTube の動画を見たが、いずれも「だとしたら」と「かもしれない」を繋げて事実とするというような空想的なロマンの域を出ない。自分の都合で論理展開をしてはならない。これは歴史を研究する上でとても大切な価値観である。冷静に情熱を持って史実を追い求めなければならない。政治的・個人的に都合よく解釈するのではなく、実際に何があったのかが明らかにすることが望ましい。

古代メソポタミアは現在から遠く隔たった最古の文明であるとしても、現代と変わらぬ人間が、その時代の現実を生きていた。そうした人間の生気あふれる存在として描くことが歴史学になる。学問・研究であることを忘れて、無視したりしてはならない。(前田, 2020, p12)

ロマンはこのようにして、シュメル人を生気溢れる存在として描く意欲としては肯定的に捉えられると考える。

滅びたシュメルとコロナ禍の世界

『シュメルとウルの滅亡哀歌』ではシュメルの神々の決定によりシュメルの秩序「メ」が滅ぼされ、ナンナ神の都市ウルは飢餓に喘ぎ、敵から殺戮を受ける。確かに王権を受けた都市であるが「永遠には続かない」運命が示される。そして、歌の終わりには再興が示唆される。シュメルが滅びた後、『マルトゥの結婚』で説明されるようにアモリ人がやってきた。(岡田・小林, 2021)

これを現代に喩えれば、コロナ禍で世界の秩序は崩れ「ニューノーマル」が思案されている。シュメル人が滅び次の王朝が興ったように、今は転換期なのかもしれない。方丈記が再注目されているように、シュメルにも目を向ける人が増えたら良いと感じた。

【参考文献】

- 『シュメル神話の世界—粘土板に刻まれた最古のロマン』 /岡田明子・小林登志子/中公新書 2021 年
- 『ギルガメシュ叙事詩』 /月本昭男 訳/岩波書店/1996 年
- 『古代オリエント史講義—シュメールの王権のあり方と社会の形成』 /前田徹/山川出版社/2020 年
- 『メソポタミアとインダスのあいだ—知られざる海洋の古代文明』 /後藤健/筑摩書房/2015 年
- 『メソポタミア文明の光芒—楔形文字が語る王と神々の世界』 /月本昭男 監修, 平山郁夫シルクロード美術館・古代オリエント博物館 編/山川出版社/2011 年